リンゴを中心とする果樹栽培を副業とした水田地帯に大別できる。近年の急速な工業化，住宅化による農地減少によって専業農家にとっては比較的集約栽培による作付体系がとられ蔬菜，果菜等の作付が増え，他に水田を畑地とし花卉・観葉作物の温室栽培が農家収入を上げる傾向にある。また愛知用水がこれらの農業生産向上への可能性を与えたとも云える。

小牧市の都市化については，名古屋市の衛星都市としての性格上名古屋市を中心とする中京圏内の都市化の進展と一致し昭和３５年頃から急激に進みつつある。工業化は誘致工場を中心として進められ機械・金属が中心であるが，ここ２，３年は，名神・東名・中央の三大自動車道の結節点という交通の利点により，運輸業，サービス業などの進出が目立ち昭和４１年完成の日本最大のトラック・ターミナルはさらにその傾向をうながすことになる。進出工場の本社は名古屋市が約６０％をしめるが交通事情の緩和に伴い京阪神からの進出が著しくなりつつある。住宅化は，名古屋市の人口漏出現象により県営住宅などの集団住宅が主体となり進められている。市内での都市化の進行は飛行場の存在によりその周辺では妨げられている。かくて小牧市の都市化は，名古屋市の衛星都市としてのベッドタウン的性格よりもむしろ新興工業都市としての色彩が強くなりつつある。

宇治市の地理学的考察

石　原　素　子

調査地域は，京都府南部旧山城国中央部に位置し，琵琶湖に源を発する宇治川が京都盆地に流れ出た谷口に旧宇治町を母体として，１９５１年附近町村の合併により成立した地域である。東西１０.０Km，南北１０.７Kmで京都府総面積の約1.5％にすぎない。

山城盆地で最も早く文化の開けた地で，西方前方に巨椋池を控え，自然の景観と天然の要害を兼ね，大化の頃から谷口の交通集落として発達し，史跡も多い。

研究内容を自然景観と人文景観に大きく分け，自然景観の中で地形と気候をとり扱った。

この地域の地形は，東半の大部分が古生層を基盤とする醍醐笠取山塊で，最高５００m前後で，この山地を宇治川が嵌入メアンダーを描きつつ先行的に切っている。南部の宇治丘陵は，鮮新～洪積層にみられるbadlandの地貌が特徴的である。この地域は特に地形と地質の関係が密接で地形区分をすると，１）古生層山地，２）旧洪積丘陵，３）新洪積台地，４）沖積低地，と大きく４つに分類でき，２）３）はそれぞれ３段～２段の段丘地形を示し，３）は２）の縁辺を帯状にふちどっている。

人文景観では農業と都市化について扱い，あくまで農業を主とし，都市化による農業の変貌をみ

ていったが，宇治に於てはやはり農業というと，産額，栽培面積ともに非常に少いにもかかわらず，依然として伝統的な茶の依存度が一番大きく，新興地域に量より質で対抗し，高級茶（特に宇治市は碾茶（抹茶）の生産に力を入れてきたが，昭和３０～３３年をピークに都市化の波と同時に荒廃茶園の増加などにより茶園は減少しつつある。地形と茶園の関係は，地形と地質，茶園と土壌との関係から当然ここでは地形との関係は密接になり，茶園分布は洪積地に密になっている。しかし，茶種の点から地域区分すると４つの地区に区分でき，しかもその区分は地形区分とほぼ一致する。即ち，山間では宇治独得の覆下園が不可能な為煎茶が中心となり，平地に移るに従い玉露から碾茶へと変ってくる。茶業経営内部の問題としては，茶園の減少と共に問屋兼荒茶工場主に茶園が集中する傾向にある。

巨椋池は，昭和８～１６年の干拓事業により約2,０００町歩の美田と化し，主に水田単作地としてこの地域の穀倉地帯をなしてきたが，昭和３８年以後この干拓田にまで住宅地が入り込み新開地の様相を変えつつある。

この地域の都市化は，ここ２，３年京都市の都市圏の拡大により，府内でも特にめざましく，茶園の多い洪積台地か居住地の適地と一致したが為，茶園が都市化の波を乗りこえきれず減少してゆき，しかも時期を少し遅くして，洪積丘陵，干拓田へと宅地化は進出し，京都市のベッドタウン的性格をますます濃くしてゆく状態にある。

埼玉県東松山市周辺の地理学的考察

上　野　延　子

調査地域は，埼玉県のほぼ中央部にあって東京都心部より約５０Km，池袋から東武東上線で１時間の所にある。いわゆる〝首都圏〟なるものに含まれており，「市」であるものの，今だかなり農村的色彩の強い地域である。本地域を地理学的に解剖するにあたって，以下の項目を設定した。

第一章　調査地域概説

第一節　自然環境（位置，気候，地形，地質）

第二節　人文環境（歴史，交通，産業）

第二章　地　　形

第一節　地形区分の基準

第二節　各地形面細説 ― 丘陵，台地，段丘，

第三節　丘陵上砂礫層について